

2022年5月30日 Vol.198

物言う株主が活躍する季節

アヤメや花菖蒲に続き、紫陽花が咲き誇る季節となって参りました。明後日からは6月に入り今年前半の折り返し地点が接近して参ります。ウクライナ戦争の長期化による物価上昇の一方で、日本ではコロナ禍がやや一服し私たちの生活が元に戻りつつある今日この頃です。こうした中で日本の株式相場は相変わらず方向性がないまま膠着状態が続いています。空前の利益を上げている海運株や今後の受注増が期待される造船、防衛関連企業の株価が堅調なほか相応に動きが見られますが、大半の銘柄は下値模索が続き見送り商状が続いています。とりわけマザーズ指数を構成する中小型株や昨年以降にIPOを果たした銘柄の多くは調整色を強めており、なかなか投資家の関心が高まっていないのが現状です。

こうした下値模索が続く株式相場の中で今年も6月後半は3月期決算会社の株主総会がラッシュとなります。コロナ禍によってオンライン化が進む中で大半の企業が機械的に終わらそうというのが株主総会ではありますが株主との年に1回の交流のチャンスでもあり、企業ごとに事情が異なるとは言え、熱心な投資家や大株主に名を連ねた投資家にとっては時には一言物申してみようかと言う気持ちも生じる時期となります。IRに熱心な企業にとってはこの時こそチャンスと総会決議に先立つ時間において株主からの質問に丁寧に回答しようと努めますが、株価の低迷で今年は投資家からかなり厳しい質問が飛び交うものと推察されます。今年もまた新たに大株主となった物言う株主（＝アクティビスト）が株主提案を行使する事例も見出せます。それに対して企業側はすべて拒否をするなど投資家との対峙が見られますが、企業にとっては総会の決議終了まで気が抜けない日々が続くこととなります。企業が、これまで蓄積したキャッシュの有効活用など物言う株主にとっては格好の突っ込みどころです。上場企業にとっては株主総会やその後に開催される株主懇親会など投資家との対話や交流が、対峙する関係ではなく今後の経営に活かせるチャンスとなれば幸いです。

昨年は125社、今年は4月28日まで24社がIPOを果たしましたがその中にはIPO後の初めての株主総会という企業もあるかと思えます。新たな株主を集めて開催される株主総会は企業経営者にとっては晴れの舞台かも知れません。ファンドなど物言う株主の存在が市場では話題になりつつある中で多くの不特定多数の株主に支持されて成長を果たすべくポジティブな経営施策を打ち出し多くの投資家の期待に応えてもらいたいものです。

なお、中小型銘柄への関心の無さから今年の2月から4月までのIPO24社のうち初値が公開価格を下回ったのは6社、時価が公開価格を下回っているのは11社にも及んでいません。また初値を割れているのは20社にも達しており、投資家はIPO市場から離れてしまった感があります。こうした中、1カ月余りお休み状態だったIPOが5月31日のトリプルアイズ（5026）から復活し、6月は投資家の期待の下で13社のIPOが予定されています。株式市場にホットマネーを呼び戻せるのかIPO市場で活躍する企業の登場に大いに期待したいと思えます。

（東京IPOコラムニスト 松尾範久）